

下流及平以出山集行，中製，新刊本集行(每刊100山集行)，知和四有77二第刊集行每份可



# 春燈

2016  
December

12 月号

主宰の句

安立公彦

月代や幼児に手をあづけられ

稲雀街の灯とほく点り初む

重陽や故山の団居今さらに

現し世に四悪は絶えず秋深し

大歳時記の綻び修す夜寒かな





安住敦の句

冷やかに壺をおきたり何も挿さず

『古暦』昭和二十九年

万太郎に「あきくさをこつたにつかね供へけり」と言う句があるが、それと対照的な、そして連想する句である。万太郎は「こつたにつかね供へ」、敦は「何も挿さず」と言うそれが微妙に表現されている。其処に敦の反骨精神が見受けられるのではなからうか。

万太郎あつての敦、敦あつての万太郎の世界である。

本田 保



安住敦の句

老しづか梅雨の火鉢に火を埋けて

『歴日抄』昭和四十年

「赤坂伝馬町」と前書がある。寓居での師、万太郎の姿の一端を詠んだものと思う。この句は昭和三十三年作となっているが、師はその前年に、一人息子耕一を結核で亡くしている。縁の薄い父子であった万太郎の胸中には自責の念もあつたに違いない。雨続きの肌寒い部屋で一人もの思いにふける師の姿に胸をつかれたであろう、敦先生の熱い想いが伝わって来る。

松山三千江

# 燈下集



○ 西川保子

一すぢの道おのづから芒原  
奥近江晚稻の波のひろごりぬ  
余生減る葡萄ひとつぶ含む間も  
夫の遠忌近づく二十三夜月  
光りつつ鳥渡り来や新娶

○ 佐藤信子

眉若き思惟の菩薩や初紅葉  
奉納と墨痕太く新走  
朝からの精進揚や秋彼岸  
新松子塔は古色を深めけり  
朝市に旅の荷ふやす秋日和

○ 中嶋昌子

早鴨の来てゐる気配山の堰  
夜半醒めて露置く頃と思ひけり  
放埒な葛ふところに花を抱く  
かすかにも雨の間合を虫のこゑ  
遙けしや瑞穂の国の稲筵

○ 片桐てい女

貞任の背にさめざめとつづれさせ  
案山子なら一本足がよかりけり  
有頂天に辿り着く気の豆の蔓  
秋思とは逆立の脚壁にあづけ  
桑括り見通しの利く上州路

○ 渡辺若菜

農道を通る近道鱚雲

鱚雲村に一つの小学校

囁かれ頬染めし日の鱚雲

柿灯る若き領主の笑顔かな

天高し山懐の五重塔

○ 西岡啓子

朝霧の町のあけゆく匂かな

新涼や水に放てるゆで野菜

青空の大きくゆらく竹の春

雨傘の手放せぬ日や秋彼岸

十月の雨に始むる一日かな

○ 中村紀美子

古戦場ただ赫々と曼珠沙華

一本も百本も寂曼珠沙華

暁夜の径おしろい花の匂ひ来る

夕鴉低く伏せとぶ野分中

赤とんぼ汀女の影を見失ふ

○ 浅木ノエ

銀狐の婚の雨ふる花野かな

風の萩考ふること止めにけり

秋の日や老いたる父の爪を切る

孝行をさせてもくれず萩のこ糸(逝)

鶏小屋のさわぎしづもる無月かな

○ 藤丸誠旨

ひとむらの萩が身をもむ風の息

光なき夜をしるがねの芒かな

待たされて舌打つ影に虫の声

月探さんひとり闇夜を歩きけり

彼岸花片便りではあるけれど

○ 懸林喜代次

牧水忌キオスクに買ふカップ酒

射的屋のをんな身重や秋祭

秋うらら五台列なる保育カー

愛ちゃんは嫁にあけびは食べ頃に

綱引や運動会もたけなはに

○ 豊谷ゆき江

文庫本の百円均一秋湿

風運ぶ雨の匂や糺祭忌

あつあつの朝粥供へ秋彼岸

大鍋のロールキャベツや秋夕焼

茶目つけを忘れぬ母の夜長かな

○ 赤岡茂子

胡弓の音記憶新たや風の盆

風の盆直面まぶし男舞

稔り田の車窓明るし里近し

墓洗ふ父母に阿弟に詫びいくつ

父母ありてこそこの故郷赤とんぼ

○ 後藤眞由美

虫の音の会話に入るカフエテラス

後れ毛を撫でゆく風や十三夜

船簞笥にからくりありぬ秋深し

鶏鳴の空の冥きに碓星

独活は実には焔に家の建ちにけり

○ 川崎真樹子

色変へて空は九月を主張する

たましひの重さに窪む菊枕

食べ終へたる葡萄骨格標本めき

台風といふ大壁を傘で押す

蜻蛉一匹空の余白のことさらに

○ 木村梨花

新酒酌む言葉の端の国なまり

みちのくのめくら暦や稲熟るる

風立ちて風にうなづく稲穂かな

夕蜻蛉遊び足りない子がひとり

細く引くこけしの眉や秋ともし

○ 溝越教子

かなかなや母の短き世をおもふ

公園にひとり残る子草の花

久の晴れ迷ひ込みたる花野路

迷はずに生きよと見つむ鬼やんま

献灯に灯ともりけり水の秋

春星賞受賞作（20句）

柿たわわ―追憶記― 宮崎 洋

ふゆあけぼの母の焚く火のほふかな

侘助のうすももいろや妹うまる

耕人の父にしたがふ鳥の数

売られゆく二ひきの子やぎ雛の家

春昼の母を泣かすや死の病

玄関にわが家のつばめ迎へけり

深息す薫風しばしとどめむと

かくれんぼの鬼のこさるる余花あかり

さみだれやひとりあそびの母のへや

おしおきの闇に干草にほひけり

たからもの持ちより蚊帳の兄妹

牛冷す山の入日をしたたらせ

家の灯のすずしや母の起居にも

台風とて一家こもれるうれしさよ

深みゆく闇に落穂をひろひけり

小春ぞら四十路の母の野辺おくり

暮れのこる追羽根のこゑ妹嫁ぐ

父のなき父の田圃の春げしき

母衣蚊帳にいつかかへる日あらむかな

石垣の柿のあをぞらあるばかり

春星賞受賞作（20句）

## 冬夕焼

ホスピスの大きな窓や冬紅葉

巡回の若き医師団十二月

凧や日ごとに細る叔父の脛

小春日や点滴引きて談話室

病棟の長き廊下の寒さかな

ベッド起こし祝ふ誕辰冬薔薇

病窓の冬夕焼に集ひけり

木の匙の重湯ひと口霜の朝

## 荒井ハル工

死に水は酒だと笑まふ冬ぬくし

暮早し帰宅うながす細き声

ホスピスの聖樹に灯す金の星

キャンドルの病棟巡る聖夜かな

付添のベッドの軋み寒月光

暁の病室に掻く葛湯かな

枯木星点滴二拍子で落つる

うはごとに呼ぶ妻の名や冬の闇

今生の別れカトリア胸に置く

散りやまぬ木の葉しぐれの別れかな

ふるさとに帰る御霊や山眠る

蠟梅に透く薄ら日や七七忌

# 当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

天高し塩甘赤穂の握り飯

鯛の風が影追ふ切通

木村屋の餡麩麩由来の秋思かな

かばかりの栗剥きかねて共に止む

しみじみと幻戯の名優鱈雲

○ 中澤弘

釣瓶落しをさな留守居の目の健気

水切りの波紋色無き風を曳く

木歩忌や濡るる地蔵の朝日影（墨堤地蔵坂）

種無しとふ言の葉重き葡萄吸ふ

竜胆や牛鳴く牧の朝まだき

○ 佐藤博重

秋分の銀座通りを大かもめ

街角の男の手より秋うち

学生記者の肩先の赤とんぼかな

東京市道路元標雁渡し

ベランダに人の影ある無月かな

○ 荒井ハルエ

かろやかに新涼の米とぎにけり

夜顔の闇深めゆく白さかな

よるべなく中洲にゆるる秋の草

特攻兵の母への手紙つくつくし（蒲田神社句）

秋風や弾痕あまた鉄兜

○ 永井恵子

白秋を揺らす程良き風の向き

秋澄むや易やすと越す県境

葬送に相撲甚句や菊の花

故里の佳き名戴く今年米

新米の湯気に落とすや地卵を

# 春燈の句

安立 公彦選



菊の香や京に家郷の医聖の碑

福島 室井津与志

ウズベクや子らも棉摘む頃ならむ

秋薔薇のほのかに匂ふ夜の卓  
秋彼岸母の茶箱の蓋ひかる  
とつぷりと暮れて一鳴き秋の蟬

千葉 廣瀬 克子

穂芒の揺れは追はれし猿なるや

柿落葉積もる三年留守の家

覗込むわが顔写す秋の水

軍艦島水平線までいわし雲

長崎 増田 菖波

バス降りて渚伝ひの墓参かな

校庭の声はたと消ゆ秋の暮  
老翁の鈴付き五竿あきのかぜ

東京 小林 文良

浜の墓水替へ彼岸花も替へ

十五夜や陶の狸のまろき腹

おくんちの数揃ふ子ら愛らしや

今日の月雲井に立ち来翔ること  
長き夜のキツチンタイマー鳴らしけり

ハンモック天と地と人ゆられけり

東京 吉田とよ子

秋立つや廊つややかに禪の寺

作句魂己が道行く蛇笏の忌

東京 鈴木としお

亡き夫の囁きかとも虫の声

深秋や最上階の灯の残る

涼新た墨堤に馬つながれて

木洩日にワイン染しむ秋日和

台風一過警報気にすることもなく

兵庫 伊藤 百江

独りにはひとりの知恵や敬老日

二天門潜るや境内紅葉映ゆ  
ひとことの言へず添水の鳴るを聞く

神奈川 宮崎 洋

秋うらら外出に軽き靴選び

恋しさのつる一日や酔芙蓉

# 余言

安立公彦

新松子塔は古色を深めけり

佐藤 信子

一読大和に点在する古刹のゆみぎない風姿が浮かぶ。別けても奈良の古寺は、その古寺の背景をなす風物、鑑賞する仏像・寺院建築の何れを見ても、深い感銘を覚える。

「新松子」は今年出来た松かさ。また青い実だ。神がその木に天降るのを待つ（マツ・松）意から、松の字が生まれたとある。いかにも古刹にふさわしい。作者は今、その新松子の奥に立つ五重塔を見つつ、深い思いに耽ける。「古色を深めけり」に、その思いが靜謐な感動を呼ぶ。

自販機の釣銭にふと秋湿

柴崎 富子

「自販機」、正しくは自動販売機。現今のわが国には、こういう略式名称が正式な呼称を越えて罷り通っている。例えば今時自由民主党などと呼ぶ人はいない。自民党だ。余聞はひとまず措いて、その自販機から出て来た釣銭を

受け取る作者。その釣銭に湿りを感じた。多くの人に使われている自販機だ。釣銭の出し入れも多い筈。その湿りはその中の誰かが使った湿り気とも言えよう。決して涼やかなものではない。それを作者は、「秋湿」と感じた。素晴らしい感性だ。「ふと」がその感性を柔らかく包む。

雨音の秋の籐椅子となりけり

松橋 利雄

『安住敦全句集』を見ると、「籐椅子」の句が二十五句ある。中でも好きな句は、へ籐椅子や読むべきものに堀辰雄だ。昭和三十七年の作。句集『暦日抄』所載。

この句、「雨音の」が「秋の籐椅子」を呼ぶ。籐椅子があらわでない。しかし一句の中心となっている。作者はいま、その籐椅子に腰掛けて雨音を聞いている。庭木も草花もいつしか秋色を深くしている。こういうひと時は願って出来るものではない。思いの深い句だ。

絵日記や子は朝顔に声かけて

大嶋 洋子

いろんな場面が思い浮かぶ。夏休みの子供が絵日記を書いている。宿題のテーマは朝顔の成長。学校から朝顔の植えられた鉢を持ち帰り、庭先に置く。やっと咲いた朝顔。子供はその朝顔を画帳に描きながら「花開いた朝顔に話しかけているのだ。形こそ違え、誰にもあつた光景である。

作者はその一瞬を捉えて表現する。絵日記、子、朝顔  
どの言葉も一句のテーマにふさわしい。「声かけて」が、  
それをしっかりと愛情をもって受け止めている句だ。

頼らるる幸せにあり敬老日 高橋 和女

昨今「敬老の日」という国民の祝日を衷心から祝福して  
いる集いがあるだろうか。敬老の日に限らず、国民の祝日  
には国旗を掲げることが普通だったのは遙かな昔となつて  
いる。私の町内にも居ない。隣の町内に一軒あるのみだ。

九月の本部句会で特々選に戴いた句。「敬老日」につい  
て考えさせられる句だ。「頼らるる幸せ」とは、敬老を受  
ける立場の我われにとつては最高の贈賜である。この句  
日常における作者の、道義に適った生き方を背景とする。

こんな日があつてもいいと案山子かな 近藤 牧男

近頃案山子を見ることもめつたにない。案山子と言えは  
〈物の音ひとりたふるる案山子哉 凡兆〉は絶品だ。〈倒  
れたる案山子の顔の上に天 三鬼〉もみごと。〈夕焼のあ  
へなく消えし案山子かな 万太郎〉は、詩情を呼ぶ句だ。  
案山子がかつて秋を代表する生活の季語だった。

この句、「こんな日があつてもいい」という口語調が  
何とも親しみを呼ぶ。それを「と」で結び、如何にも案山

子と対話しているような表現となつているのがいい。しか  
しこの上五中七は、作者が案山子に言わせている仮託の言  
葉であることは言うまでもない。如何にも作者の表現だ。

秋彼岸路傍の石の日のぬくみ 卜部 黎子

この句を見て、久しぶりに古い友人に逢つた気がした。  
「路傍の石」である。道端の何でもない石ころ。そのやや  
太めの石の面を、今秋の午後の日が匂うように包み込んで  
いるのだ。折しも秋彼岸。「日のぬくみ」がいい。

名作といわれた『路傍の石』は、昭和十二年一月から六  
月までの朝日新聞に連載。山本有三の五十歳の時の作品。  
昭和四十年に文化勲章を授与される。貧しい生れの吾一少  
年のひたむきな生き様に共鳴した人も多かつたろう。

幸せの句新米炊きあがる 諸岡 孝子

この句を見ていると、戦後間もない頃の代用食ばかりの  
時代を思い出す。時折白米のご飯の出る日は、台所から匂  
つてくる炊きあがつたご飯の香りが、育ち盛りの少年の身  
には堪らない喜びとなるのだった。

時代も世情も大きく変わったが、炊きあがつた新米の香  
を「幸せの句」と捉える思いは不動のものである。東日本  
大震災から五年半が過ぎた。まだまだご苦労も多かろう。